



母娘狂艶

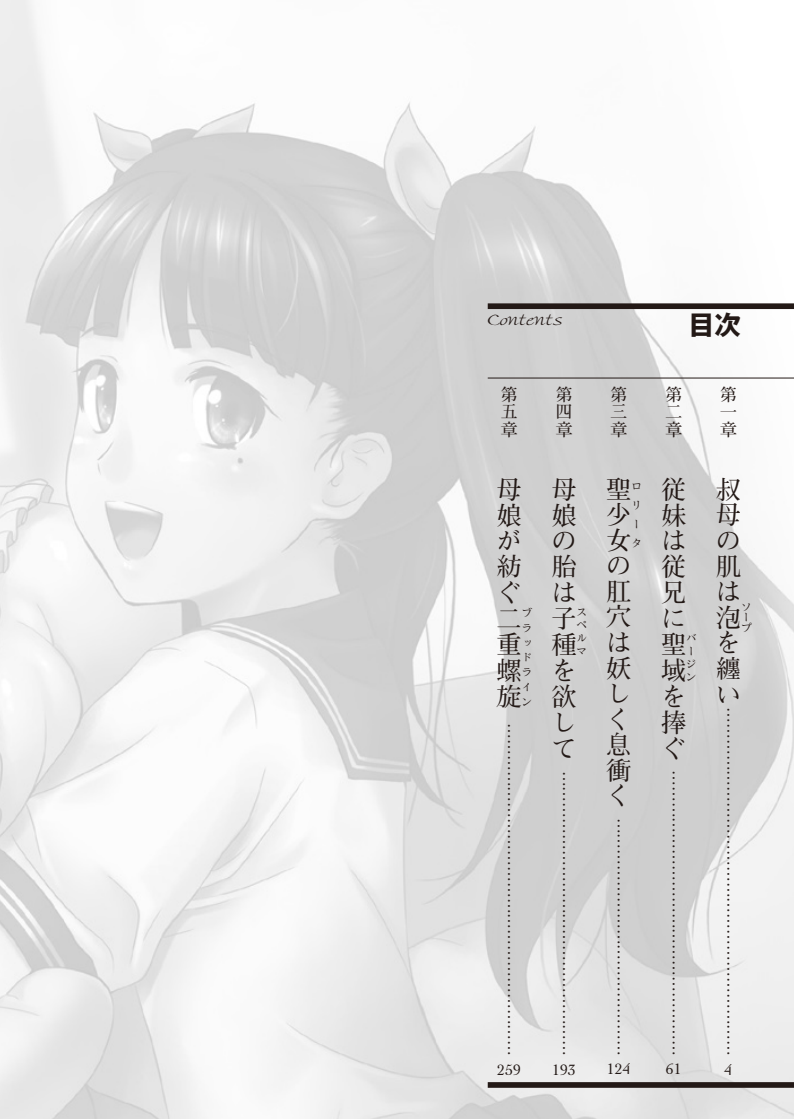
誘う叔母、惑わす従妹

屋形宗慶

挿絵 / ズンダレぼん

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



Contents

目次

第一章	叔母の肌は泡を纏い……	4
第二章	従妹は従兄に聖域を捧ぐ……	61
第三章	聖少女の肛穴は妖しく息衝く……	124
第四章	母娘の胎は子種を欲して……	193
第五章	母娘が紡ぐ二重螺旋……	259

登場人物

Characters

日生 郁子

(ひなせ いくこ)

瑛吾の叔母。翻訳業を営み、一人娘の日和とともにマンションで暮らしている。落ち着いたのある三十代の女性。

日生 日和

(ひなせ ひより)

郁子の一人娘で、瑛吾の年下の従妹にあたる。瑛吾を「お兄ちゃん」と呼んで慕う、ややブラコン気味の少女。

殿田 瑛吾

(とのだ えいご)

学生。進学のため大学の近くに住む叔母・郁子の家に下宿する。幼い頃から叔母に対して憧れを抱いていた。



「あの、叔母さん、いいですからっ、大丈夫ですからっ……！」

気が気ではないのが瑛吾だ。今もなお股間では愚息が腹立たしいほど反り返っている。下宿初日から風呂場で欲情して勃起していることが知られたら、下宿の話は御破算、郁子との関係は灰燼かいじんに帰すだろう。どうにかこの場を誤魔化し、なんとか郁子に勃起がばれないうちにお帰り願おうと必死であった。

「あら……♡」

「お、ひは……ッ!!」

瑛吾が今最も隠したい部分に、瑛吾の物ではない手が纏わりついた。思いがけない刺激を受けて、瑛吾の口から変に裏返った声が出た。

「いやっ、あのっ、これは違って……!!」

しみる目を瞬またたかせて、自然と溢れてくる涙でシャンプーを流すように目を擦る。そうしてやっと目を開くと、目の前の鏡に自分とその背後にいる郁子の姿が映っていた。

「んふふ……」

眼鏡を外したせいか、どこか印象の違う美貌に艶めかしい笑みを浮かべる美しい叔母の表情に、瑛吾はぞくりと肩を揺らす。

「こおんなにカチコチ……♡」

浴室の壁に反響した艶めかしい声が独特のエコーを伴って聴覚を刺激し、同時にしなやかな指が陰茎に巻きつく。硬く強張った瑛吾の男根は、初めて耳にする叔母の媚声もスパイスとなり、やんわりと握り締められただけでも著しく反応してビクビクと脈打った。

「こ、これは、あの、すいませんっ……」

弁明の言葉が出ない。瑛吾は郁子に男根を触られているという、ある意味では夢のような状況にもかかわらず、言い逃れの言葉を頭の中で必死に考えながら、其の場凌ぎに謝ることしかできなかった。

「気にしないでいいのよ？ 当然の生理現象だもの」

郁子が陰茎を握る手をゆるめると動かし始める。言い逃れることにばかり向いていた思考が、快感によって半ば強制的に現実に向き直らされると、緊張と惶惑こうわくに占められていた意識が恥ずかしさと当惑に変わった。

「ど、どうしたんですか郁子叔母さんッ……こんなのは、おかしいですよ……」

「昔、一緒にお風呂入ったの、覚えてる？」

——ドキッ……。

愚息がこうして勃起している原因をズバリと言い当てるような郁子の言葉に、心臓

が破裂しそうな勢いで動悸を打つ。

「あの時……私、君に悪戯いたずらしたくてどうしようもなかったのよ？」

「な……なんですか、ソレ、どういう……」

言いかけた瑛吾の背中に、温かくて柔らかい郁子の豊乳が密着する。背中が乳房で包まれてしまいそんな感触に、彼は脱力感にも近い恍惚を得る。

「私の胸やおマ○コを目を見開いて見詰めて、今みたいに勃起してる君をね……こうしたかったの」

大きさは人並みよりも勝るだろう瑛吾の肉茎。郁子の手の中で目一杯硬くなっているそれは、亀頭の中程まで包皮を被っていた。郁子は石榴色ざくろに鬱血した亀頭に皮を被せては剥くように、ゆっくりとしごく。

（ああ、オレ、あの時勃起してたのか……そうだよな、あんなに昂奮してて勃たつてないはずだよな……）

彼自身はあの時、勃起しているという自覚はなかった。しかし、より明確に記憶を持つているだろう郁子の言うことは瑛吾の記憶ともぴたりと符合し、説得力があった。

「こんな初々ういういしい反応だもの、まだ童貞なのよね？」

「……はい」

「よかった♡　それで、ただけど……もしイヤじゃなかったら瑛吾君の童貞、私が貰っちゃってもいいかしら……?」

信じられない申し出に、瑛吾はくらっと目眩めまいに襲われる。もちろん、願ったり叶ったりと言つていい申し出である。瑛吾が長らく夢想して、数知れずマスターベーションのお供にしてきた妄想が現実になるのだ。

しかし、瑛吾は返答に困った。これまで妄想し続けてきたことではあるが、現実にならなかつたコトに及んでしまうのは躊躇ためらわずにはいられなかつた。いかに憧れ想つてきた女性とはいえ、郁子は紛まがうことなく叔母なのだ。

「……やっぱり、初めてがこんな恥知らずの女じゃイヤ、よね?」

背中越しに聞こえる少しトーンを落とした声。このままチャンスを逃してもいいのかと、瑛吾の中で常識から逸脱することを恐れる倫理的な人格と不道德さに昂奮を覚える人格とが闘せめぎ合い、選択を求める。

もう十年も思い続けてきた。この先もまた何年、何十年と同じように想うだけで過ごすのか。しかもそのうち、大学在学中の何年かは一緒に暮らしながら。

十年の月日を経て、より美しさを増し、妖艶な魅力までも身につけた叔母。振り向けばそこにあるであろう女体。豊満さを詰め込んだ胸の肉房は今も大輪の乳暈に乳首

を埋没させているのだろうか。どつしりとした超安産型の腰回り尻は、スキニーパンツの拘束から解き放たれて表情を変えているだろうか。

バスト、ウエスト、ヒップと、コークボトルのように大らかなボリュームを見せつける肉体を見たい、触れたい、触れ合いたい。

想像、妄想するほどに背徳と倫理を乗せた天秤は、背徳へと傾く。

「そんなことはないですッ！ 嬉しいです、郁子叔母さんなら！」

否定すれば、おそらくは最初で最後であろうチャンスは失われ、郁子との距離が開く気がした。音を立てながら一気に背徳へと傾いた天秤に衝き動かされるように、ほとんど反射的に答えた瑛吾は彼女の手を掴んで向き直り、全裸の彼女と正面から顔を合わせた。

「本心？」

「え、あ……はっ、はい」

向かい合うや逆にまっすぐ見据えられて、瑛吾はドキッと一つ胸を高鳴らせて大きく頷く。

「嬉しい」

頷いた次の瞬間には、郁子の顔が目の前に迫っていた。そのまま、瑛吾の唇は彼女

の唇に覆われていた。

瑛吾にとってファーストキスでもあったが、感慨を味わう間もなく、唇を割って舌が入り込んできて彼の意識はすべてそちらに持って行かれる。

初めて体験する、唇と唇が触れ、舌と舌が絡み合う感触に言いようのない感激が湧き上がった。

（郁子叔母さんとキス！ キス！ 夢じゃない、ああ、夢でもいいから醒めるな!!）
ふっくらとした唇は想像以上に柔らかく、マシユマロが押しつけられているかのよう
にふんわりとしていた。唾液を纏って進入してきた舌は、巧みに彼の舌を見つけて
絡みつき、甥の舌そのものを堪能するように熱っぽく纏わりつく。

瑛吾はほとんど硬直しているといった具合だったが、長く想い続けた婉美な叔母と
接吻を交わしているという現実^{むさほ}に昂奮しながら、受け身ながらも快感を貪っていた。

「っ……ふふ、まずはキスから♡」

郁子が唇を解放した時には瑛吾はただならぬ昂奮に耳まで赤くして、まるで酒に酔
っているかのようだった。いや、実際に酩酊したように目が回っている。郁子と触れ
合い、唇を重ね、舌と唾液を味わってもなお、宙に浮きそうな多幸感とともに現実感
のなさがつきまとい続けた。

「それじゃ、次は体を洗ってあげるわね」

郁美は瑛吾から少し身体を離すと、ボディソープのボトルを手に取り、ポンプヘッドを自らの胸元に向けた。

——シュコツシュコツ。

ポンプヘッドを押し込み、ボディソープを自分の豊艶な乳肌^{ちち}に浴びせる。真珠を溶かしたような液体石鹸は、彼女の丸みを帯びた肌^{ちみ}に沿ってゆっくりと流れ落ち始めた。その様が、精液を浴びせかけられた姿を想像させ、瑛吾の昂奮^{あお}を煽る。

彼の記憶の中にあり、十年間鮮明さを保っていた郁子の裸体。今、目の前にある現実の裸体と重なり合い、瑛吾には同一人物の二つの女体がダブって見えた。

十年の時を経ても、叔母の身体に一つとして劣化した部分はない。それどころか、郁子らしい肉感^{にくかん}はより一層増して、歳相応の成熟感^{せいじくかん}を得ながらも張りを損なわず、女体としての完成度を高めたかのように魅力に溢れていた。

郁子は垂れ落ちるボディソープを手で掬うようにして、牡を惑わすに肉感を持った自らの身体に塗り広げ、同時に泡立てていく。みるみるうちに郁子のむっちり^{むっちり}と肉厚な女体はふわふわとした泡に包まれていった。

この後^{のち}に続く行為のために進む卑猥な準備を目にしながら、瑛吾は否応なく充血が

極まり、痛みすら伴う愚息を手で覆う。

(あれは要するに、アレだ……身体で洗ってくれるっていう……)

人並みにエロマンガやネット上に散らばったエロコンテンツを見てきた瑛吾には、郁子の進めている準備がどのようなことへ繋がるのか想像できた。

あの極めて豊満でたつぷりとした乳肉を中心に、ボリユーム溢れる女体を使って自分の体を洗ってくれるというのだろう。

彼の人生で、本物のエロティシズムを感じているのは今まさにこの瞬間だった。

「瑛吾君、こういうのも初めて？」

ボディソープをたつぷりと泡立て、郁子は泡を纏った身体を瑛吾に寄せながら訊く。「はっ、はいっ……」

泡が自分の胸板に触れると、思わず瑛吾は声を上擦らせて震えてしまう。

そんな様子を愉しむように郁子は数度身体を寄せて離してを繰り返した後、泡にまみれた女体を瑛吾に密着させた。そして正面から抱きつくとき、身体をゆっくり上下させて瑛吾の体を自分の肌で洗い上げていく。

泡立ったボディソープがぬめり、二人の肌を滑らせる。瑛吾の体表の形に合わせて郁子の柔らかい肌を形を変えながら密着し、まるで郁子の柔肌と触れた部分が包み込

まれるような感觸を瑛吾に味わせた。

体正面から背中へ。巨乳が押し当てられると、彼女の特徴的な乳首が瑛吾の背中を刺激しながら上下に動く。乳頭を包み隠す、モントゴメリー腺が点々と隆起して、母乳を与え子を育む^{はぐ}という機能の高性能さを感じさせる乳暈。その感觸が瑛吾の背中にも伝わっていた。

「次は、ちよつと腕を伸ばしてね」

「え、うわ、ああ」

彼の腕を取って水平に上げさせると、郁子は腕を股に挟み、腰を前後させて洗う。濃密な陰毛がジョリジョリと腕に擦れ、より一層豊かにボディソープが泡立つ。

泡と陰毛に隠れて直接は目に見えないが、瑛吾の腕には確かに女の割れ目の感觸があつた。腕ではあるが、初めて接する肉裂に瑛吾の昂奮は天井知らずに昂^{たかぶ}り、触つただけで射精してしまうのではないかというほど愚息は漲っていた。

「瑛吾君のほうから触つてくれないのよ？」

腕を洗い終わると郁子は椅子に腰掛けた瑛吾の太腿の上に跨がり、太腿を片方ずつ、腕を洗つたのと同じ要領で洗い上げていく。腿に跨がる姿勢のため、郁子の胸の位置も高くなり、立派な胸乳が瑛吾の顔の高さにあつた。



「さあ、本当に冷める前に食べましょう」

二皿のオムライスを手にはダイニングテーブルに移ると、二人は向かい合って席に着く。瑛吾の前にはケチャップが赤いハートマークを描いているほうの皿を。郁子の前には白濁したザーメンがドロリとかけられた皿が配される。

「それじゃあ、いただきますましようか」

「いただきます……」

(本当に食べるのか……?)

自分の前にあるオムライスにスプーンを入れながらも、瑛吾は自分の皿のさらに向こう側に置かれた郁子の皿が気になって仕方がなかった。

「うふふ……いただきますまあす♡」

瑛吾の視線に気づいたのだろう。チロリと小さく舌舐めずりして見せた郁子は、ザーメンがたっぷりとかかった部分にスプーンを入れ、一さじ掬い取った。

——どろお——……。

卵白と見紛いそうなほどドロリとした精液が、黄色いオムライスの表面をコーティングしている。その一部が垂れ落ちて、皿の上にボタと落ちた。

「あーん……♡」

大きく唇を開き、これ見よがしにザーメン滴るオムライスを口に頬張ると、郁子は瑛吾と視線を合わせながらゆつくりと咀嚼し、味わう。

美食の法悦とも、変態の淫悦ともとれる、うっとり目を細めた天にも昇るような笑顔を浮かべる郁子は、セックスで見せる淫妖なものとはまた違った愉楽の目の色をしていた。

自らの吐精した種汁が美しい叔母の口に入り、食物として味わわれている。

傍目には食事というあまりに普通の行為でありながらも、その実は、裸体にエプロン一枚という破廉恥な姿で、甥の精液を食すという異常な行為。ダイニングで食卓を囲むという日常の中で、さも当然のように非日常的な方法で食欲と淫欲を満たす。

性欲と食欲が一つの場に同居する異常さ、言い換えれば猥褻さが、言いようのない劣情となって瑛吾の下半身を沸き立たせる。

「ツクン……うふふ、瑛吾君のザーメンソースがけオムライス、美味しいわぁ♡」

満面に満足そうな淫笑を浮かべながら、叔母はさらにもう一さじ取って口に運ぶ。瑛吾は自分の分のオムライスを食べることも忘れて、その変態的でいて、この上なく猥褻な光景に見惚れていた。

「瑛吾君、ケツズリ、気持ちよかったかしら？ 私も初めてだったから、気持ちよく

してあげられるか不安だったんだけど……」

特製オムライスを、皿にザーメンの残滓もほとんど残さず平らげた郁子は、おもむろに切り出した。

「えっ、あつ、はい！ あのままイキそうでしたから……！　すごく、イイです！」
不意の問いかけに、まだ一さじも口にしていないオムライスのスプーンを取り落としそうになりながら、瑛吾は尻の肉圧を股間に思い出して熱っぽく返答していた。

「そう……！！　よかったわあ、うふふっ♡」

甥の答えに、郁子は少女のようにパァッと顔を綻ばせる。彼女が一回りも年上の叔母であることを忘れてしまうほど、少し小首を傾げるようにしながら指先をもじもじと遊ばせる仕草は可愛らしく、瑛吾はときめきを覚える。

（オレを悦ばせるためになんて、嬉しいな……）

それは文字通り嬉しさであると同時に、叔母という牝が自分に肉欲奉仕するために心思を尽くしていることへの優越感でもあった。

○
夏の盛りも過ぎ、空気は秋の香りを漂わせ始めている。

瑛吾は勉強机代わりのテーブルにノートを広げたまま、床に大の字になっていた。

大学が休みのうちにやっておこうと思った自習はほとんど進んでいない。手につかないと言ってもいい。

天井をぼんやりと見詰めながら考えるのは、ただただ叔母と従妹のことであった。下宿を始めてもうすぐ半年を迎える。その間に溺れた、日生母娘との肉欲の数々。童貞であったことが遙か昔のここのようにすら思われた。

(こんな関係……続けてていいのか……)

そんな風に考え込むようになったのは、夏期休暇がもう二週間ほどで終わりを迎えるという今週に入ってからだ。

夏休みに入り、郁子と日和の母娘と肉欲に溺れる回数は一躍的に増えた。朝から晩まで、目覚めてから眠るまで、母娘が代わる代わるといった具合でひっきりなしに求めてくる。

八月の半ば頃には疲労が顔に出るほどになって、食事はスタミナをつくようなものが常に並ぶようにもなった。郁子に買い与えられて、精液量が増えて濃くなると噂のサプリメントと、滋養強壯のドリンク剤まで飲用するようになった。

母と娘で対極のように魅力と味わいの違う女体を比較するように味わい、それぞれの違いを愉しむことは至高の法悦にして究極の快楽であることは間違いなく、瑛吾も

なんら不満などない。しかし、彼は自分自身を含むこの家族の危うさに深憂を抱き始めていた。

自分が彼女らを受け入れてしまったことで、逆に二人の中に巣くっている愛慾という病魔を凶悪化させているのではないか。

以前にも一度は考えた危惧は今ここに至って、より鮮明となりながら日に日に強まっていた。

(オレは、どうしたらいいんだろう……)

肉欲に流され、溺れるばかりの自分への自己嫌悪。郁子と日和に発情を促す存在になつてしまった自分が、一つ誤れば暴走してしまいそうな危うい母娘をなんとかしてはいけないという責任感。二つが頭の中で二重螺旋を描いていた。

——コン、コン、コン。

緩やかなテンポのノック。すぐに郁子だとわかるノックは、瑛吾に今晚の情交は叔母とだなど直感させる。

「どうぞ」

彼は返事をする、大の字に寝転がっていた身を起こして叔母が部屋に入ってくるのを待った。

「こんばんは」

「お邪魔しまーす」

ドアが少し開いて、外から声がする。思いがけず叔母だけでなく従妹の声もあり、瑛吾は開いていくドアに注目した。

「お、お……」

思わず漏れる感嘆の声。思わず、まったく衝動的に、彼は部屋に姿を現した母娘に向かつて、座ったまま身を乗り出すようにして熱い視線を向けていた。

「うふふ……似合うかしら♡」

いつも通りのうなじ辺りで纏めた黒髪に、縁なしの眼鏡。垂れ気味の目元に一点落とした墨のようなホクロを持つ上品な顔立ちは、いつ見ても惚れ惚れとする。そして、なによりも瑛吾という牡を惹きつける、構成するすべての曲面が猥褻な女体。郁子の圧倒されるほどに立体感のある肉体を、細かい網目状の黒いストッキングが包んでいた。

全身のほぼすべてがストッキングに包まれているが、鎖骨辺りから上と前腕中程から先、二つの乳房、そして淫毛が繁る土手から尻の割れ目までの股部分は肌を露出している。

セックスをするためだけに機能的に作り上げられた、交尾専用作業着といつていいボディストッキング。郁子の柔肉に網目をやんわりと食い込ませた薄衣は、彼女の肉厚な身体の立体感をより強調していた。

「私もお母さんみたいのがよかったのになー」

一方、日和はそれほど過激なものを身に着けているわけではない。むしろ、一昔前なら学校の体育の時間にはどこでも見られたというくらいありふれていたものだ。

白い半袖の体操着に、紺色のブルマー。少女のボディラインにフィットした体操着は運動をするに当たって実に合理的な構造であり、実物のブルマーを目にした瑛吾には、女の魅力をより引き立てるすばらしい被服に見えた。

真っ白な体操着の胸元は、日和のささやかな乳房の膨らみをなぞってこぢんまりと隆起している。その体操着の裾を入れた紺色のブルマーは、日和の脚の付け根に食い込んで少女の若々しく張りのある肉感をありありと見せつける。

「あ、う、うん……エロいです、二人とも、うん、エロい……!」

瑛吾はコクコクと頭を縦に振り、それぞれに違った切り口ながらも負けず劣らず扇情的なコスチュームを披露する母娘に賛美を送った。

「よかった♡ 二人でおめかししてきた甲斐があったわ、ね?」

「うん。お兄ちゃんが喜んでくれて嬉しい♡」

母娘の妖艶が屈託のない笑顔に、瑛吾は目が回るような恍惚感を得る。こうして性の昂揚感に流される自分に嫌悪感を抱きながらも、母娘を目の前にするとそんなことは欲情の前に霧散してしまう。

「さあ、瑛吾君も本能に素直に従って……今夜は三人で愉しみましょう？」

バストオープンロボットのボディストッキングから溢れる魅乳を揺らしながら郁子が、ブルマーと白いソックスの間をスラリと伸びる健康的な脚を見せつけるようにしながら日和が、瑛吾に迫った。

（別に……二人はなにもおかしくなんかいないんじゃないか……？）

母娘に二人がかりで部屋着を脱がされた彼は、ベッドにもたれるようにして床に座らされる。股間では、勃起によって自力で包皮が剥けた愚息がヘソにつかんばかりに反り返っていた。

（ただ、人より性欲に素直なだけで……なにも……おかしくなんかいない）

二人に身を任せながら、まるで仲良く食事の支度をするかのように和氣藹々としている母娘を見詰めて瑛吾は彼なりの悟りに達する。

「……郁子さん、日和ちゃん。一人で舐めてください……させてみたかったです、

ダブルフェラっというやつ」

それはおそらく、瑛吾が自らの望む性欲遊戯を二人に求めた初めての言葉だった。

「ええ……ええ、あなた、の望むように」

なぜだか、甥の望みを聞き届けた叔母が感動したように目を潤ませる。同時にその表情にはこの上ない喜悅の色が浮かんでいた。

瑛吾が脚を投げ出して座る股の間に、母娘が並んで寝そべる。そして、左右からペニスを挟撃するように舌を這わせ始めた。

初々しい桜色をした日和の舌と、薔薇色が艶めかしい郁子の舌。二枚の舌が、ペニスを軸として時には同期するように揃って亀頭を舐め回し、時には相反するように互い違いに種袋から亀頭までを上下に舐め動く。

「うんっ！」

「キャット!!」

しばらくは母娘で寄り添い、仲睦まじく分け合うようにペニスを舐め回していたが、不意に郁子が娘を押し退けた。

日和からスペースを奪った郁子は、天を衝くように熱り立つ甥の生殖器を、真上から飲み込むようにしてしゃぶりついた。

むように小刻みな亀頭への吸いつきで快感を引き出し、溢れ出る先汁を吸って味わう。十分に啜え込めない分、手で余った竿部分をしごき、種袋をお手玉するように上下に揺さ振って刺激する。

「んぱっ♡ おにいちゃん、きもちいい？ んぢゆるうっ♡ んぱっ♡ んまアッ♡ ふえらちおしあわせ♡ くちま〇こがとつてもしあわせになっちゃう♡ ね、おにいひゃん、わらひのふえらちお、おかあひゃんより、きもちいい？」

フェラチオという奉仕を愉しんでいるような淫欲に濡れた瞳を瑛吾に向けながら、日和は風車のようにベロベロと舌を回して亀頭を舐め回す。

「あ、う……ッ!？」

思わず少女の問いに肯定の返事をしそうになつた瞬間、日和の尻の三、四倍はあるのではないかという郁子の巨臀でドンと実の娘を押し返し、再びスペースを取り返す。「あらあら、日和のフェラテクなんてまだまだだね？ 経験十分な私のほうがキモチイーンじゃないかしら？」

母娘の間で繰り広げられる熾烈な男根の奪い合い。母が亀頭を舐めれば、娘は負けじと種袋を頬張って玉をしやぶる。

(甲乙なんてつけられるものじゃない……)



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ! **19日発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

ヴァルキリー

<http://www.comic-Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!